
静電気少女とそよ風少年

流山晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静電気少女とそよ風少年

【Nコード】

N3708BA

【作者名】

流山晶

【あらすじ】

ヒロインの山崎由梨子、通称ピリ子は県立高校の1年生。彼女は静電気を自由にコントロールできるというあまり役に立たない特技を持っている。中学校での損な役回りに懲りた由梨子は、高校では大人しくしているつもりだった。そんな彼女が、個性的な仲間に出会い、恋をし、困難を乗り越え成長していく物語。

第1話 入学式

「責任をとるってどういうこと？」

それまで霧の中を浮遊していた意識に、突然、はつきりとした声が響く。お姉ちゃんの声であることは間違いないと思う。いったい、誰と話しているのだろうか？ 身動きできないあたしには、相手を確かめるすべはない。と、相手の声が聞こえてきた。

「一生、彼女の面倒を……」

「できるの？」

「自信は……」

「無理をすることはないわ。それに……」

「でも、僕が……」

痛み止めのせいだろうか？ 一瞬感じた痛みが薄らぐのと同時に、一時的に固定されていた意識がまた浮遊し始める。そして、外側の意識から眠りに落ちていく。なんだかとても大事なことを言われたような気がする。忘れてはいけない大事なことを……

[illegible]

こういうのを桜吹雪と呼ぶのだろう。

正門から丘の上の校舎まで、緩やかな坂道になっている。その道の両側には太い幹の桜が何本も連なっている。つい数日前までは、満開だったと思われる。それが、今、風に吹かれて一斉に散っていく。右から風が吹けば、右側の桜の花びらが、こちらの方へ降りかかってくる。左からの風には、左側の桜から花びらが降りかかってくる。真つ黒なアスファルトの道に落ちた真つ白な花びら群は、まるで潮の満ち引きのように前後左右へと風でゆすられる。

どうやら桜並木は、さびしそうなあたしを歓迎してくれるらしい。

家族の誰かには入学式に来てほしかったのだけれど、両親は店が忙しくて来られない。お姉ちゃんはお姉ちゃん、隣の県で一人暮らしを始め、大学に通うことになっていて忙しい。というわけで、県立緑が丘高校入学式の日、あたしは遅刻しそうになりながら一人校舎へ向かう。周りには誰もいない。いや、一人いた。坂道の随分下の方に男子生徒が一人いた。今日は、新入生だから、彼もその一人なのだろう。視力0.7のあたしには急いでいる男子としかわからなかった。

その時、目の前で直径1 mほどの小さなつむじ風ができた。桜の花びらが渦を巻いていたから、立派なつむじ風だ。丁度歩く先にあったから、おもしろそうだと思ってそのままつむじ風の中に入った。その瞬間、風の勢いが増し、あたしの周りで花びらが猛烈な勢いでくるくる回り出した。あれよあれよという間に円筒状の花びらの壁が出来上がる。これって、もしかしてお姉ちゃんの好きな異世界への転送かしら？ 『花びらのトンネルを抜けると異世界』って設定は悪くないと思う。お姉ちゃんなら狂喜すること間違いなし。折角だから、あたしも楽しんじゃおう。灰色の高校生活に少しでもいい色があってもいいと思うの。あたしは、両手を広げ花びらに合わせて回った。肩下まで垂らしたストレーターの髪もふんわりと広がる。そして、息を深く吸い込んで目をつぶり、異世界への転送に備えた。その瞬間、風がピタリとやんだ。

この学校の制服のスカートの丈は少し長めである。服装検査という丈を測る検査もあるらしい。もっとも上級生はミニに直しているの、そんなに気にしなくてもいいのだろう。とにかく、この日のあたしのスカートの丈は長かった。ので、油断していた。風がピタリとやんで、あたしは、目の前に異世界が広がっていることを信じて目を開けた。が、立っていたのは、先ほどまで歩いていた坂道。何も変わっていない。ただ、花びらは風でどこかへ行ってしまった、少し長めの丈のスカートは、お猪口になっていた。つまり、完全にめくれ上がっていた。ので、生パンが思いつき見えていた。めく

れ上がったスカートがふんわりと降りてくる。その向こうには先ほどの男子学生1名が立っていた。唾然としていたと思うが、視力0.7のあたしにはわからない。あたしは、恥ずかしくなって、脱兎のごとく坂道を駆け上がった。オレンジ色の生パンも恥ずかしかったけれど、異世界転送に備えていたのはもっと恥ずかしかった。灰色の高校生活から逃れて遠い異世界に行けると、本気で考えたのかしら。

体育館は、生徒と父母でごった返していた。前方が新入生の席、後方が保護者席。入口の掲示で見た自分のクラスの1年6組を探す。生徒はすでに座り始めているが、ほとんどが知らない生徒だ。同じ中学からここに入学した生徒は20人程しかない。だから、一番の心配は友達ができるかどうかだ。一瞬、優しそうな小柄な女の子と目が合う。黒目が綺麗な子だ。この子ならよそ者を邪険にすることはないと思う。

「あのー すいません」

「はい、何でしょう？」

「ここは、1年6組ですよ。勝手に座っていいのかしら？」と聞いてみる。

「え、6組で合っているけれど、出席番号順に座るんだって……ってさっき先生が言ったんだけど…… 聞いていないということ、遅れたのね」

「まあね。とにかくありがとう。まだ出欠取っていないわよね」

「まだよ」

「じゃーセーフね。あたしは、出席番号40番、山崎由梨子よ。よろしく！」

「ぷっ、おかしな子。出席番号つけて自己紹介するなんて」
言われてみれば、確かにおかしいわ。

「そ、そうね、おかしいわね。あはは」

いつもの癖で、笑ってごまかした。彼女も自己紹介をする。

「新谷真美です。真美と呼んでね」

あたしは、早速、友達ができて嬉しくなった。気がついたら、手を挙げて、ハイタッチを促していた。新谷真美はクスッと笑ってハイタッチに応じてくれた。と、スラリとした影が視界を遮り

「お、ピリ子も同じクラスか。よろしく！」

といって、勝手にハイタッチをする。げ、同じ中学のアイツだ！

よりによって天敵の正村まこむらと同じクラスになるなんて最悪！ それにしても、昔のあだ名をこんなところで出さないでほしい。この高校ではあたしは大人しくしているつもりなんだから。

「ついでにこちらのお嬢様にもタッチ！ 俺、正村翔、よろしく！」
正村は、少し腰をかがめて、真美の目を覗き込んでハイタッチをした。お嬢様と呼ばれた真美は、真っ赤になる。正村は一見するとさわやかイケメンだ。大きな瞳で見つめられ、女子よりきれいな手で触れられれば、真っ赤になるのも頷ける。正村の実態を知らない乙女ならね。真美はしどろもどろになった。

「しゅ、出席番号16番、女子、名前は、ま、真美です」

「よろしくな、真美坊」

そう言って、正村は真美の頭に手を載せると、ショートヘアをくしゃくしゃにした。絶妙に崩したヘアスタイルが本当にぐちゃぐちゃになったが、本人は放心している。これは、暫く放っておくしかないわね。

校長先生、教頭先生、来賓の県会議員からの挨拶があり、そのあとPTA会長、生徒会長と続く。印象に残ったのは、教頭先生とPTA会長。教頭先生は『君たちは、半分、大人なのだ』としきりに強調していた。教頭によれば、大人とは、何か問題が起きた時に、自分で責任をとるということらしい。そのくせ、半分、子供なのだから教師の言うことは聞かないといけないのだそうだ。それって教師のご都合主義じゃないと思っていたら、隣に座った黒縁メガネの男子もカチンと来たらしく、何やらぶつぶつ言っている。

「半分、大人やから自由やし、半分、子供やから少々なことは目をつぶってほしいわなあ」

あたしは、クスリと笑ってしまった。

P T A会長は、部活のすばらしさを強調していた。P T AはO B O Gの寄付金を元手にかなりの資金援助を部活にしており、相応の成果を上げてほしいらしい。実は、緑が丘高校は部活が充実していることで有名だ。資金があるだけでなく、時間割上も、部屋割上も他の公立に比べて恵まれているらしい。もちろん、これだけのアメには鞭も一緒についてくる。何かにつけて部活がこき使われるらしいが実態はよく知らない。どちらにしろ、多分灰色の高校生活で、あたしが唯一期待しているのが部活。何に入るかは決めていないけれどじっくり考えるつもり。もしかしたら、かわいい男の子がいるかもしれないし、素敵な先輩がいるかもしれないし…… むふっふっ…… よだれがたれそうになる。

入学式の挨拶で、一番まともだったのは、生徒会長。学校行事への協力を低姿勢でお願いしていた。熊みたいな体格で、妙に弱腰なので、こちらが心配になる。どこかの中学の生徒会長とは大違いだわ。そして、先生の紹介があり式は終わる。保護者も交えて記念写真をとり、保護者は解散し、生徒は教室に移動する。

担任の早坂友恵先生は英語担当で、卓球部の顧問。およそ卓球には似合わない体格だけれど、にこやかな先生だ。

教室の席順は出席番号順。で、あたしは最後だから窓際の一番後ろだ。先生からは遠いし、2階の窓からの眺めは悪くない。つまり、普通なら特等席。が、一つ、いや二つ問題がある。あたしは目が悪い。さすがに0・7で、一番後ろはつらい。いい加減、あきらめてメガネを買うしかないわねえ。母さんに『インターネットばかりやってるから』って怒られるのは確実だわ。もう一つの問題は右隣に天敵の正村が座っていること。正門から続く桜並木を見ながらため息をついた。

正村翔とは同じ中学だった。アイツとは縁がある。アイツは生徒会長で、あたしは副会長という腐れ縁。中学生のころ、あたしは子供だった。友人にかつがれ、生徒会選挙に立候補した。立候補したのは会長職、アイツも会長候補。そして、選挙であたしはあっさり負けた。そのままだったら、あたしが副会長になることもなかった。が、不幸にも、当選した副会長も次点だった立候補者も転校して居なくなった。おかげで、副会長職があたしに回ってきた。生徒会では、あたしは会長のアイツに振り回され、こき使われた。アイツは口先だけだ。かっこいいこと、理想論を掲げるから生徒の受けはいい。そしてあたしは生徒会と教師の板挟みにあって苦勞させられた。生徒会はもうこりごり。緑が丘高校では、大人しくしているつもり。できるだけ、正村だけには近づかないようにと思っていたのだけれど、同じクラスで、隣の席という最悪の事態。ため息もつきなくなるわよ。

突然、先生が名前を呼んだ。どうやら1回目は聞き洩らしたらしい。

「山崎由梨子さん、聞こえますか？」

「は、ハイ」

「ということで、お願いします」

「ハイ？」

先生がため息をつく。

「聞いていなかったようですね。小野寺君と席を交換です」

「へ？」

「とにかくお願いね」

「は、ハイ」

よく、分らずに返事をしてしまった。教室中の生徒があたしを見ている。隣の正村を見ると、目線で『行け』と言っている。オロオロしているといつの間にか小野寺君らしい男子がそばに立っていた。なぜか鋭い目付であたしのことを見下ろしていた。あたしは慌てて

カバンを持ち、立ち上がった。去り際に彼はぼそつと呟いた。

「ありがとう」

そのまま彼は、さっきまであたしが座っていたスチールの椅子に手をかける。しまった！ 放電し忘れた！ その瞬間、彼の指から椅子に小さな青い火花が『パチッ』と飛んだ。彼はしびれた手を振りながらあたしを睨んだ。

「ごめんなさい」

と小声で謝る。そばで見っていた正村が呟く。

「おめでとう、高校でのピリ子の被害者第一号」

その正村を彼がまた睨みつけた。迂闊だったわ、考え事をしているうちに、左手で無意識に椅子にマイナスの電荷をためていたのに違いない。結構派手な火花が飛んだから5 kV、10〜7 Cぐらいかしら。席を立つ前にもう一度左手で電荷を戻しておくべきだったわ。あたしは、彼の元の席に座る前に、そつと窓のサッシに鍵で触って、自分のプラスの帯電を解く。多分、この一連の騒動に気がついたのは正村を含めて3人だけ。これから気をつけないと。でないと言えない。正村にも口止めしておかないといけないわね。

普通、皆が冬場に体験する静電気は摩擦によるもの、例えば、ウールのセーターを着て、ポリエステル製の布張りの椅子に座っていたとする。ウールはプラスに、ポリエステルはよりマイナスに帯電しやすいので、立ち上がった瞬間の摩擦でセーターを着た人はプラスに、椅子はマイナスに帯電する。夏場は湿度が高く、空気が電気を通すので帯電してもすぐ除電（放電）するが、冬場は湿度が低く帯電が残しやすい。そして、プラスに帯電した人がドアノブに触ろうとすると、ドアノブ側にマイナスの電荷が誘起され、ある程度まで近づくともうプラスの人とマイナスのドアノブの間で放電が起きる。青白い火花が見えるときは、およそ5 kV以上。それぐらいの電圧だと放電のショックで痛い思いをする。放電しても電流の流れる領

域が太い、つまり広い面積に広がっていれば電流密度は小さくなり、ショックはない。だから、ショックがいやなら、鍵のような金属を指の腹でしっかり握って金属を介して放電すればいい。指の腹という広い面積を電流が流れるからショックはない。

いつからこうなったのかはよくわからないけれど、あたしの場合には普通の静電気と全く違う。あたしは静電気を発生させコントロールできる。仕組みはわからないけれど、心臓辺りで鼓動に合わせてプラスとマイナスの電荷がつくりだされるみたい。できた電荷を意識的に左手と右手でコントロールできる。体の左側がマイナス、右側がプラスだ。丁度体の真ん中に自家発電の電池があって、左右の両手がスイッチになっていると考えればいい。例えば左手で金属を触って、左側に溜まったマイナス電荷を金属に放出する。そうするとあたしの体はプラスに帯電する。右手で同様のことをすれば、体はマイナスに帯電する。普段は電荷が発生しても自然と中和されて何も問題は起きないのだけれど、たまに、今回みたいに無意識に電荷を手から放出して帯電することがある。そういう時は、もう一度手で触って中和すればいいのだけれど、今回は突然、先生に声をかけられた。気がついた時には、彼が横に立っていたから、そこまで気が回らなかった。彼には痛い思いをさせて悪かったわ。でも、最初からあたしを睨んでいたのは、それを予期していたのかしら？

学校からの帰り道、早速友達になった新谷真美、青木芽衣と一緒に帰る。芽衣はフチなしメガネをかけ、ツインテールに髪をまとめている。外見は知的で清楚な感じだけれど、性格は男っぽいみたい。「ねえ、芽衣。さっきの席の交換、えーと、小野寺君だったわけ。彼との席の交換のことなんだけれど、一体どうしてそうなったの？

あたしは聞き洩らしたんだけど、理由を教えてください」

「さあ、私も知らないわ。理由は教えてくれなかったわよ。なんだか小野寺君の秘密に触れなくなかった雰囲気だったけれど」

「秘密？ 何だろう？ わざわざ後ろに來たぐらいだから、あたし

のように目が悪いわけじゃなさそうね」

「あれ、由梨子は目が悪いの？」

3人の中では一番無口な真美があたしに尋ねた。

「そうなの。だから、小野寺君が元いた席、前から2番目の席は悪くないわ。でも、小野寺君って目付が鋭くて怖そうな子ね。芽衣は知ってる？」

「小野寺君ねえ…… 少なくとも一中じゃないわ。その様子だと真美の出身の三中でもないし、由梨子のいた二中でもなさそうね…… それにしても目付は鋭かったっけ？ 先生に名指しされた時は、大人しくて温和そうな感じがしたけれど」

「そう？ おかしいわね。明日からいやでも顔を合わすから、もう一度よく見ておくわ」

芽衣が口を開く。

「ま、彼だけじゃなく、知らない子はクラスにいっぱいいるから、明日からのランキングが楽しみね」

「ランキング？」

「そうランキング。男子生徒をランキングするが私の趣味」

げ、一体、芽衣はどういう趣味してんの！ 目を丸くしている真美やあたしに構わず喋り続ける。

「とりあえず、イケメンランキング、秀才ランキング、性格ランキングぐらいかなあ。まずは、クラスメートが対象ね。ゆくゆくは同学年、全学年に広げたいわ。今日の初見でのイケメン1位は正村君ね」

ぶっ、正村か。

「そう言えば、正村君って由梨子と同じ二中出身なの？」
芽衣はあたしに聞いてきた。

「正村？ ウン、あたしと同じ二中出身よ」

「由梨子と仲がよさそうだったじゃない。もしかして彼氏？」

「はあ？ まっさかー 彼氏なわけじゃないじゃない。腐れ縁よ」

「じゃー フリー？ 彼女いないの？」

芽衣はもしかして正村がいいの？ やめておいた方がいいと思うけれど…… ふと隣の真美に目をやると、ほんのり顔を赤くしている。こっちはもっと重症だ。これは、うっかり変なことを言っただけを壊さない方がいいかしら？ それに、正村だって根は悪い奴じゃないし……

「少なくとも、あたしが知る限り、つきあっている彼女はいないわ。芽衣がアタックするのなら今のうちかもね。真美もね」

しまった、調子にのって二人にけしかけてしまった。

「??」

芽衣が不思議そうな顔をしてあたしと顔の赤い真美を交互に見つめる
「えーっ！ もしかして真美、正村君に惚れた？」

「……」

真美はうつむいて黙っている。

「友情にひびを入れたくないから、私は二番手以降でいいわ。というか、私は性格重視派だから、とりあえずランキングを完成させてから考えるわ。ということ、一番手は真美で決まり！」

芽衣、お前もサドよ。真美は二人のサドに挟まれて固まっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3708ba/>

静電気少女とそよ風少年

2012年1月9日18時54分発行